

阿嘉島臨海研究所 10年の歩み

阿嘉島臨海研究所

The first ten years of Akajima Marine Science Laboratory

AMSL



近年、地球環境問題への関心の高まりから、サンゴ礁が話題に上ることが多くなりました。特に最近では、地球温暖化の原因である二酸化炭素の循環におけるサンゴ礁の役割や、サンゴ礁における生物多様性の保全が活発に議論されています。日米包括協議の場でもサンゴ礁の保全を進めることが同意されて、サンゴやサンゴ礁の研究も今後一層活発になっていくものと思われます。

阿嘉島臨海研究所は、財団法人熱帯海洋生態研究振興財団(保坂三郎理事長)の現地研究部門として、1988年7月に開設されました。財団は、熱帯海域の生態系の保全や有効な利用についての基礎研究を行う場を広く内外の研究者に提供する他、サンゴ礁についての調査研究や啓蒙活動を行い、地元の産業育成などを通じて地域振興に寄与することを目的として、保坂三郎理事長と大森信理事(東京水産大学教授)らの熱意によって、科学技術庁の認可を受けて設立されました。少し長くなりますが、朝日新聞(1988年8月16日)に掲載された大森理事の「ダイバーが作った臨海研究所」を、当時の意気込みを示すものとして転載します。

ダイバーが作った臨海研究所

慶良間列島阿嘉島に地元の協力で

抜けるような空の青。コバルトブルーの水と白い波の縁取り。沖縄の夏の海は鮮やかで光まぶしい。

浅瀬にはミドリイシサンゴが鹿の角のような小枝を密生させ、まわりに色とりどりの魚たちが群れる。岩礁のくぼみには棘の長いガンガゼがひそみ、深みの砂地にはナマコが多い。澄んだ水に潜ると頭上にタカサゴの大群。時には巨大なイトマキエイが姿を見せるかもしれない。南の海ではスキューバダイビングが大変な流行である。寂しかった離島の海岸が若者たちで賑わい、マリンスポーツが村の暮らしを変えようとしている。

遅れ目立つサンゴ礁の海の研究

人気が先行するダイビングに問題は少なくないが、海を楽しむ人々が増えるのは結構なことだ。潜れなくても、サンゴ礁ではマスクをつけて華やかな水の世界をのぞいてほしいと思う。

スキューバダイビングの普及は、サンゴ礁の生物学を大きく進歩させたことで特筆されよう。水面からの手探りの調査が目で見える観察に変わって、それまでの教科書を書き直すほどのおもしろい事柄がたくさん分かってきたからである。

そんな科学の話を聞きながら潜水を楽しみ、海から多くのことを学んでいるダイビンググループに私は関係してきた。海好きのメンバーたちの語らいは、やがてサンゴ礁の科学とスポーツダイビングを結びつける小さな臨海研究所を豊かな自然の残る慶良間列島の阿嘉島に作りたいという願いとなった。私たちは熱帯海洋生態研究振興財団(略称 ETMER)を設立

し、島の人たちの協力を得て、今夏、阿嘉島臨海研究所を完成したのである。

この研究所は熱帯海域の生態系の保全や有効な利用についての基礎研究を行う場を広く内外の研究者に提供する他、科学者に限らず、島の生活や海とのふれあいを求める人たちにも利用してもらうつもりである。それらの方々との交流から新しい海の研究の方向が探れるであろうし、研究の成果が地域の人々に役立てばうれしい。

日本の果たすべき役割は大きい

熱帯の海では非常に多くの生物が実に多様な生活をしている。種類数が多いためにそれぞれの生物は相互に関係を持ち、食う食われるのバランスを維持しながら少しずつ他者と違った生き方をしてゆかねばならない。共生や棲み分けなどの見事な適応が見られるのも、サンゴ礁の生態系の特色である。

サンゴ礁に囲まれた南の小さな国々が、今、自立と発展の方法を探っている。その多くが水産資源の開発を重要課題にしているが、資源の効果的な管理や増殖に北の人たちが手を貸せる部分は意外に少ない。それは熱帯の海の生物についての基礎研究が遅れているからである。

サンゴ礁の海にはハタやブダイのような大型魚やイセエビ類、ナマコ類、カイメン類の他、ポタンや装飾に用いられるタカセガイやヤコウガイなどが分布しているが、これらの水産資源生物の多くは個体群の加入が不規則か低いレベルにある上、成熟するまでに長い年数がかかり、特定の種が多くいるわけではないのに収穫しやすいので、商業的規模で利用すると乱獲を招く。

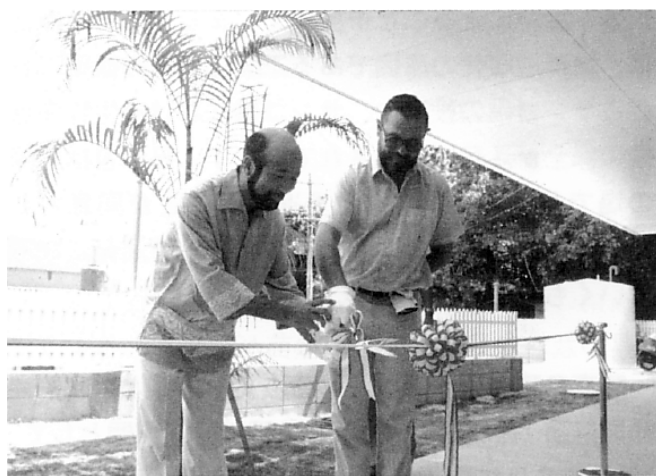
観光沖縄の現状は南の人々が「開発」を考える上で参考になろう。シャコガイやヤコウガイを採り尽くした離島の漁業はふるわず、沖縄本島は埋め立てでサンゴ礁すらほとんど失ってしまった。人工の砂浜と大ホテルとに代表される単調なリゾートの風景の連続から、海の正常な生態系や生物資源の維持は考えられない。

かつて、我が国のサンゴ礁生物学は世界をリードした時があった。南洋群島が日本の統治下にあった

戦前、畑井新喜司教授（東北帝大）が中心となりパラオのコロール島に「パラオ熱帯生物研究所」が置かれ、主として各地の大学院の学生が日本学術振興会の援助を受けて1～2年滞在していた。この研究所は戦争のさなかに10年という短い活動を閉じたが、南の島で青春を研究に賭けた若い学徒の成した仕事は今日もしばしば引用され、国際的に極めて高い評価を受けている。

戦後、日本の熱帯海域の研究は停滞し、沖縄復帰後、琉球大に臨海研究所が設立されてやっと再開した。しかし豊富で多彩な生物相に比べて、研究所や研究者の数はまだ少なすぎる。

サンゴ礁を持つ国の多くは貧しい。基礎研究を進める余裕のない途上国に代わって、自国にサンゴ礁を持つ数少ない先進国として、日本の果たすべき役割はもっと大きいはずである。生まれたばかりの阿嘉島臨海研究所が着実に歩み、その研究成果を示す日が近いことを私は願っている。（大森 信）



サンゴ礁研究の新たな拠点として阿嘉島臨海研究所が設立されてから、今年は10年目です。そこで出発から現在までの歩みを年を追って振り返ってみたいと思います。

1988年

7月19日の開所式には、国内外の著名な研究者や、科学技術庁や海上保安庁の担当課長、マスコミ関係者など約20名を阿嘉島に招待し、財団役員や地元の方々とともに研究所の開設を祝い、その発展を祈願

しました。東京では、開所式にも出席していただいたカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授 W. ハムナー博士による「海の生物の不思議な世界 - スキューバダイビングによる観察」と題した研究所開設記念講演会が7月23日、都ホテル(東京)で行われました。

阿嘉島臨海研究所は、阿嘉小中学校の西側に隣接し、阿嘉島で最も高い4階建ての建物です。1階には研究施設、2～4階に外来研究者のための宿泊室、会議室、情報資料室、食堂などがあります。開設当時の研究所のスタッフは、マネージャーに生水勝弘、シェフ土屋浩一、紅一点小島玲子の3名で、研究船「もと丸」の船長は地元の海人(うみんちゅ: 沖縄方言で漁師のこと)金城英盛氏が担当しました。

開設間もなく、琉球大学山口正士教授の研究グループによって、ヤコウガイの種苗生産研究が始まりました。ヤコウガイは、サンゴ礁域に生息する大型の巻貝で、殻の内側の美しい光沢が螺伝細工の原料として高価で取引されたために乱獲が進み、人工的な増殖技術の確立が求められていました。現在では、沖縄県の栽培漁業センターで種苗が生産されるようになりましたが、当時としては先進的な試みでした。全て手探りの状態から、採卵、孵化に成功し、約1000個体の稚貝を作ることに成功しました。この時の中心メンバーだった、菊谷賢一、小松徹の両氏は現在、それぞれトンガ国とソロモン国において国際水産協力の分野で活躍しています。今では二人ともヤコウガイ種苗生産のエキスパートになりつつあります。

次に山口教授の研究グループが取り組んだのは、サンゴの生息状況とオニヒトデの分布に関する調査でした。かつて、慶良間列島もオニヒトデによる大きな被害を受けたことがありました。1988年当時も、現在よりオニヒトデの密度は高く、これが再び異常発生に結びつくのではないかとという危惧もありまし

た。地元でも駆除対策を続け、幸いなことに大発生は起こらず現在に至っています。数カ月たった調査の間には、オニヒトデの研究で知られるグアム大学のC. パークランド教授も来所しました。

年末には、研究所開設時のスタッフ、生水と小島が一身上の都合により退職しました。

1989年

こうした調査研究の過程で、海中の状況、特に生物の分布などを熟知し、生物の飼育管理ができる常駐研究員の必要性が出てきました。そこで、1月に下

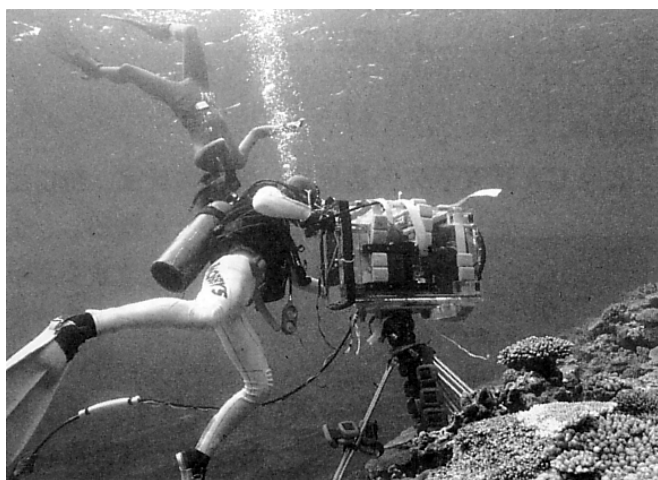


池和幸(東海大学海洋学部卒)林原毅(東京水産大学大学院修士課程修了)の2名の研究員の採用が決まりました。まず、2月に下池が着任し、研究所独自のヤコウガイ種苗生産の研究に着手しました。林原は同年5月に着任し、アサヒガニの漁業生物学的研究を担当すること

になりました。アサヒガニは、暖海の砂底にすむ大型のカニで、オーストラリア、ハワイ、台湾などで食用種として漁獲されています。多獲はできませんが、沖縄でも地域特産種としての期待がかけられています。

5月には、研究所の中心的テーマとなった造礁サンゴの有性生殖に関する研究が、オーストラリア、ジェームスクック大学のA. J. ヘイワード、P. L. ハリソン両博士を招聘して始まりました。まず、ヘイワード博士が来日し、常駐研究員を指導しながら5月から6月にかけて精力的に調査を行い、20種以上のサンゴの産卵を記録しました。6月には、(株)ソニーPCLと阿嘉島臨海研究所が共同で、ハイビジョンによるサンゴの産卵の水中撮影に世界で初めて成功しました。ヘイワード博士の指導のもと、総勢15名のスタッフが参加する大がかりなロケでしたが、その成果はコーラルストーリーという約8分の映像にまとめられ、高い評価を受けています。7月にはヘイワード博士に代わってハリソン博士が来所して

調査を継続し、合わせて 25 種のサンゴの産卵を確認しました。この結果は 1990 年 4 月の日本海洋学会で林原が発表しました。



8 月には、オーストラリア海洋科学研究所の J. E. N. ベロン博士と琉球大学(当時)の西平守孝教授が来所しました。ベロン博士はサンゴの分類学者として著名な方で、西平教授と共に、わが国の造礁サンゴ相を明らかにするために、南西諸島のみならず本州中部まで足を延ばして調査を行いました。この時の一連の調査の集大成として、最近「日本の造礁サンゴ類(西平・ベロン共著)」という大著の図鑑が刊行されました。これには日本産のほとんど全ての造礁サンゴが記載されており、その中には阿嘉島で新たに発見されたアカジマミドリイシなどの貴重な種も含まれています。ベロン博士はこの時の調査結果をもとに、わが国のサンゴ群集の危機的状況を学術雑誌 Coral Reefs(11 巻、1992 年)に報告しました。その抄訳は、研究所の機関誌「みどりいし」4 号にも掲載されています。ベロン博士はこの中で、西表島周辺や慶良間列島には貴重なサンゴ群集があるので、緊急に保全対策が必要であると主張しています。

研究所では、サンゴの研究と並行して、ヤコウガイとアサヒガニの種苗生産の研究が本格的に始まりました。ヤコウガイについては、人工採卵や幼生飼育に加えて、前年に得られた稚貝を用いて餌料選択性や餌料効率に関する実験も行いました。この結果は、下池が 1992 年 4 月の日本水産学会で発表しました。また下池は、京都府栽培漁業センターでサザエ

の種苗生産に関する研修を受けました。

アサヒガニの方は、もと丸船長金城英盛さんの協力により、阿嘉島近海で数回の試験操業を行いました。抱卵した親ガニを研究所の屋外水槽で飼育して卵を孵化させ、幼生にはアルテミア等を与えてゾエア最終期まで育てましたが、メガロパへの変態は果たせませんでした。本種の種苗生産は、いくつかの研究機関で試みられていますが、残念ながらまだ技術は確立されていません。

7 月に、レストランのシェフが土屋から満田博之に変わりました。

1990 年

5 月から、いよいよ常駐研究員による独自のサンゴの有性生殖に関する調査が始まりました。これには東京水産大学の学部 4 年次や大学院修士課程の学生も随時加わり、主に初期発生や幼生の着生条件に関する部分を担当しました。そして 8 月までの調査で、50 種以上の産卵を確認し、おおよその産卵パターンが明らかになりました。6 月にはフジテレビの取材班がサンゴ一斉産卵の撮影に訪れ、その後もいくつかのテレビ局の取材に協力しました。

7 月、オーストラリアのタウンズビルで行われたオーストラリア・サンゴ礁学会に保坂理事長と大森理事が出席し、会場のジェームスクック大学で、阿嘉島のサンゴ一斉産卵のビデオを見せながら臨海研究所の紹介をしました。その後、二人はオーストラリア海洋科学研究所を訪れて、ベーカー所長らと共同研究について話し合いました。

9 月には、研究所の機関誌「みどりいし」が創刊されました。これは、研究所の活動を記録・報告すると共に、研究所を利用した人にその成果や研究テーマをわかりやすく紹介してもらって、一般の人達にもサンゴ礁の研究に関心を深めてもらうことを目的として製作されました。これまでに 8 号が発行され、好評を頂いております。

1991 年

2 月には、林原研究員がオーストラリア東海岸の

サンゴ礁関係研究機関の視察に行きました。オーストラリアからは前年までに5名の研究者が来所しており、その一人、クィーンズランド大学のJ. G. グリーンウッド博士にお世話をして頂いて、オーストラリア海洋科学研究所や北クィーンズランド博物館など10ヶ所もの研究機関を訪問することができました。多くの若い研究者と面識をもつことができ、刺激を受けたことは大きな収穫でした。同じ2月には、新たに木村匡研究員(高知大学大学院修士課程修了)が、海外青年協力隊員としてのトンガでの任期を終えて帰国後着任し、研究員は3名となりました。木村はサンゴの卵・幼生の分散に関する研究に取りかかりました。

3月には、日本科学協会から「サンゴ礁の健康診断に関する研究(研究代表者:林原)」に笹川科学研究助成金の授与が決定し、翌年にも継続が認められて、2カ年にわたる調査が始まりました。この研究は、サンゴ礁の水質と造礁サンゴ類の成育状況等を定期的に調査し、サンゴ礁の環境保全のための基礎資料を得ることを目的に行いました。

4月からは、サンゴの有性生殖に関する調査研究をさらに発展させて実施しました。産卵パターンをより詳細に把握するため、可能な限り毎晩潜水観察を行うとともに、産卵と海況との関連を検討するために、海洋科学技術センターとの共同観測も実施しました。さらにユニークな試みとして、サンゴの卵・幼生の分散加入先を推定するために、漂流ハガキによる調査を行いました。この調査は、地元マスコミやNHKの全国放送でも紹介され話題を集めました。



慶良間海域のサンゴ群集が、荒廃が進んだ沖縄本島のサンゴ礁への幼生の供給源である可能性が指摘され、同海域の生態学的な重要性がクローズアップされました。

レストランのシェフが満田から上林利寛に代わりました。また、これまで阿嘉島では夏秋にしばしば湧水に見舞われ困っていましたので、湧水に備えて井戸の掘削と導水配管を行いました。

1992年

サンゴの生殖や発生の研究には、1990年から鹿児島大学(当時)の柿沼好子教授の研究グループが参加しており、1991年7月にはこの研究グループに国立遺伝学研究所(当時)の杉山勉教授が同行されました。これがきっかけとなって、私達と一緒にサンゴの生殖を研究してきた東京水産大学の大学院生、王文樵さんが杉山先生のもとでサンゴの遺伝子解析の研究を始めることになり、阿嘉島臨海研究所、東京水産大学、国立遺伝学研究所による共同研究がスタートしました。

この年6月に、4年に一度開催される国際サンゴ礁シンポジウムがグアムで開かれ、保坂理事長、大森理事とともに林原、下池の2研究員が参加してそれぞれ研究発表を行いました。その内容は論文として発表されています。グアムでは数多くのサンゴ礁研究者と知り合うことができ、阿嘉島臨海研究所の活動が国際的にも知られるようになりました。後に共同研究をすることになる、カリフォルニア大学サンタバーバラ校海洋科学研究所教授のD. モース博士夫妻とも、このときの発表がきっかけで交流が生まれました。

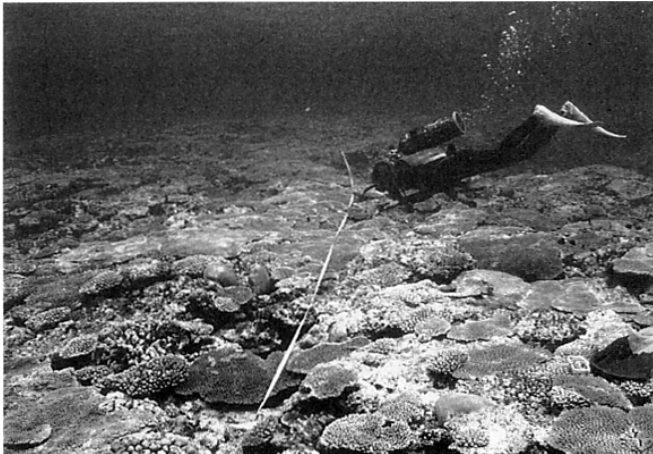
7月より3カ年、世界野生動物保護基金日本委員会(WWFJ)による「屋嘉比島の動物相を中心とした生態系調査」に下池研究員が参加し、造礁サンゴの分布調査を担当しました。

11月に行われた視察会は、財団評議員の故元田茂先生の呼びかけで、戦前のパラオ熱帯生物研究所で活躍された大御所の先生方をお招きして、当時の思い出を語り合っていたく会になりました。お集ま

り下さったのは、川口四郎、阿部宗明(故人)、三宅貞祥、元田茂のパラオ同窓生の先生方で、他に波部忠重(評議員:日本貝類学会会長)、小田原利光(日本甲殻類学会評議員)、本川達雄(東京工業大学教授)の先生方にも加わっていただき、賑やかな会となりました。パラオの研究所はわが国におけるサンゴ礁研究の原点で、当時の日本のサンゴ礁研究は世界的にもトップレベルにありました。阿嘉島臨海研究所は、パラオの研究所の精神を継ごうと、往時に活躍された諸先生から多くの教えを受けました。殊に元田茂先生は晩年阿嘉島を何度も訪れ、研究活動に有益な意見を下さいました。また多くの書籍や文献を研究所に寄贈され、それらは元田文庫として利用されています。

1993年

5月には、ミドリイシ類を専門に研究されている、オーストラリア、北クィーンズランド博物館のC. ウォレス博士を招いて、阿嘉島周辺のミドリイシ類の分類学的調査が行われました。ミドリイシ類の正



確な同定ができるようになったことで、その遺伝子解析や、翌1994年から始まる種間交配実験に着手する下地ができたといえます。

サンゴの有性生殖に関する研究は、その重点を産卵調査から初期発生や幼生の着生条件などの研究に移していきました。その一方で、サンゴの精子からの遺伝子抽出という課題もあり、また、前年の漂流ハガキ実験に関連して、阿嘉島周辺におけるサンゴ幼生の分布調査も行われました。

5月から、2カ月ごとに「アムスルだより」を発

行することになりました。これは、研究所の活動や阿嘉島周辺の海の問題を、地元の方々に知っていただくことを目的としたニュースレターで、阿嘉島の各家庭や村内の公共施設に配布して好評を頂いております。

9月には、観測史上最大といわれる台風19号が阿嘉島を直撃し、建物の一部に被害が出ました。研究所の風速計は最大風速を52.8m/sまで記録した後、あえなく故障してしまいました。この台風はサンゴ群集にも被害を与え、サンゴの被覆度が半減した場所もありました。

阿嘉島臨海研究所が科学技術庁のSTAフェロシップの外国人研究者受け入れ機関の一つになり、国際サンゴ礁学会の機関誌にその紹介記事が掲載されました。

10月に木村研究員が退職したため、再び研究員が2名になりました。木村は約2年8ヶ月の研究所勤務の後、再び国際協力事業団の要請により、技術専門家としてトンガで水産指導を行い、現在は(財)海中公園センターに勤務しています。

1994年

1月に、保坂理事長、大森理事、下池研究員らがハワイ島の深層水利用研究施設等の視察に行きました。これには、大葉英雄博士(東京水産大学助手:藻類学)も同行し、主にヤコウガイの餌料として有望なオゴノリの種苗の入手と培養法を見学してきました。

サンゴの有性生殖の研究では、杉山教授の研究グループと共同で、ミドリイシ属サンゴの異種間交配実験が始まりました。同様の試みはすでにオーストラリアやグアムで行われていましたが、阿嘉島周辺では繁殖パターンや種が明らかになっているため、一斉産卵に合わせて、そこで多数の種を用いて交配実験を行い、遺伝子解析を平行して進めるという方法は、サンゴの種の枠組みを再検討し、生物学的な本質を理解する上で優れたアプローチだといえます。メンバーの一人、王文樵さんは、ミドリイシ属サンゴの遺伝子解析の研究により、この年の9月に水産

学博士号を取得しました。

子供たちに海の大切さやそこに棲む生き物たちについて知ってもらうような教育啓蒙活動は、研究所開設当時からの目標の一つでした。この年7月には、初めての試みとして、阿嘉小中学校において特別授業マリンスクールを開催しました。ビデオやスライドを使ったサンゴやウミガメに関する講義の後、小中学校で孵化し、研究所で1年間飼育されたアカウミガメの仔ガメに標識をつけて海に放流しました。この企画は地元新聞にも取り上げられて好評であったことから、次年度は慶留間小中学校で開催しました。

この年、(社)海と渚環境美化推進機構から、「慶良間列島の造礁サンゴ類データベース作成」に対する研究助成が決まりました。

1995年

2月には、長年の懸案であった、クジラ(コビレゴンドウ)の骨格標本を所内に展示しました。

4月の新年度から、岩尾研二(鹿児島大学理学部大学院修士課程修了)と大矢正樹(北海道大学水産学部大学院修士課程修了)の2名の研究員が採用され、研究スタッフは合計4名になりました。岩尾はサンゴ幼生の着生・変態に関する研究、大矢はサンゴ群体の成長に関する研究を行うことになりました。

4~6月の期間、大阪に建設されたワールドトレードセンタービルのWTCミュージアムにて、下池研究員が研究資料として撮りためた写真を使い、慶良間列島のサンゴ礁の海を紹介する写真展が開催され



ました。

5月には、カリフォルニア大学サンタバーバラ校海洋科学研究所のD. モース博士夫妻が来所し、サンゴ幼生の着生条件に関する共同研究が始まりました。初年度から興味深い結果が得られ、学術雑誌Biological Bulletin (Vol.91, 1996)に成果の一部が発表されました。今後の研究が期待されています。ミドリイシ属サンゴの異種間交配実験も継続して行いました。

9月には、林原研究員がこれまでのサンゴの有性生殖に関する研究をまとめ、東京水産大学から水産学博士号を取得しました。

1996年

海洋科学技術センターより「サンゴ礁海域におけるベントスの定量評価に関する研究」を受託し、1月に石垣島での合同調査に参加しました。

3月には、つくば市で地球規模環境変動に対するサンゴ礁の応答に関する国際ワークショップが開かれ、大森理事、林原研究員が出席しました。ワークショップの後、ハワイ大学のR.クレイグ教授他、来日した海外のサンゴ研究者数名を阿嘉島臨海研究所に招待し、交流を深めました。同じ3月、下池研究員は「琉球列島におけるサンゴ食貝(シロレイシガイダマシ属)の生態の究明」で、(財)藤原ナチュラルヒストリー振興財団より学術研究助成金を授与されました。

4月、林原研究員は巢立ち、水産庁西海区水産研究所(長崎)に勤務を命じられた後、現在は石垣支所に勤務しています。

6月には、第8回国際サンゴ礁シンポジウムがパナマ共和国パナマシティで開催されました。これには保坂理事長、大森理事、下池研究員、林原水産庁技官が出席し、シンポジウムでは4つの研究発表を行い、阿嘉島に来たことのある何人もの研究者と会って、旧交を温めました。また、サンブラス諸島で、カリブ海のサンゴ礁の海に初めて潜りました。

10~11月には、沖縄地方の新聞・「沖縄タイムス」に「サンゴ礁との共存」をテーマに連載を持ち、地

域住民に対してサンゴ礁保全の重要性を伝えました。12月には、「サンゴ浮遊幼生の変態・着生促進物質のための研究」に対して、(株)テトラから研究助成金が3年間にわたって提供されることが決まりました。

1997年

1月、オーストラリアの北西部ダンピエールにできたオーストラリア海洋科学研究所ダンピエール支所のA.ヘイワード博士の招きで、保坂理事長、大森理事、岩尾研究員が同所を訪れ、コーラルベイまで無人の荒野の視察を楽しんで、インド洋側のサンゴ礁を観察しました。

2月には、開所式にも来られたW.ハムナー博士の業績を称えて記念セミナーがアメリカ陸水海洋学会の年会(ニューメキシコ州サンタフェ)で開催され、大森理事が招かれて「阿嘉島におけるサンゴの一斉産卵と幼生の着生」の題で、これまでの阿嘉島臨海研究所での研究成果と展望をまとめて講演しました。多くの聴衆にAMSLの名が印象づけられたことと思います。

4月には、サンゴ骨格標本などを保存するスペースを確保するため、研究所の前にプレハブの標本室を建てました。

5月に行ったマリンスクールでは、スノーケリングやグラスボートにより、阿嘉小学校の子供たちにサンゴの一斉産卵を初めて見せてあげることができました。将来のサンゴ礁保全を担う地元の子供たちに、サンゴの生命誕生の瞬間を強く印象づけることができたと思います。

11月には、日本サンゴ礁学会設立大会が沖縄で開催され、大森理事と下池研究員は設立準備委員とし

て学会の設立に参加しました。サンゴ礁をテーマにした学際的な学会として、今後の活動が期待されます。

研究所も建築後10年目を迎え、施設のあちこちに傷みが見られるようになりました。11月には、全客室のエアコンを新品に取り替え、同時にパソコン関係の充実に伴う電気配線工事、および海水配管の洗浄と中継ポンプの交換工事を行いました。

研究所設立から9年半で、外国人も含めて、大学や公立・民間機関などから185の研究グループと、120の一般グループが施設を利用しました。研究成果の主なものは機関誌「みどりいし」に掲載されていますが、その分野は慶良間列島における動植物から水質や地質に至るまで多岐にわたっています。外来研究者のお手伝いと並行して、阿嘉島臨海研究所で独自に行ってきたサンゴの有性生殖に関する研究は、産卵同調機構の解明から、着生・変態条件の解明へとウエイトを移してきました。将来の目標は、これらの研究成果を利用してサンゴ礁造園技術を開発することです。研究所に対する地元の理解も深まってきました。今後はさらに、得られた研究成果を生かして地域の産業振興に役立てることも考えて行く必要があると思われます。また、地球規模の環境破壊が危惧される昨今、サンゴ礁の環境保全のための啓蒙教育活動も重要なテーマの一つです。美しいサンゴ礁の小島の小さな研究所に課せられた役割は、ますます大きくなっていくことでしょう。設立10周年を迎え、設立当初の情熱を今一度思い起こし、前進していきたいと思っています。

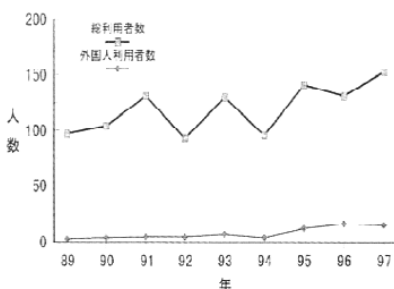


図1. 年間施設利用者数の推移 (宿泊を伴う利用者数)

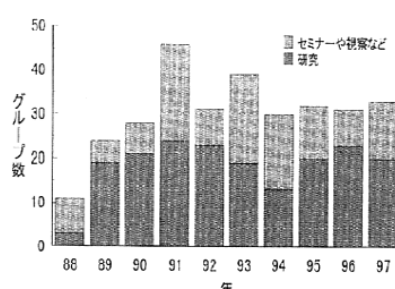


図2. 利用目的別グループ数の推移

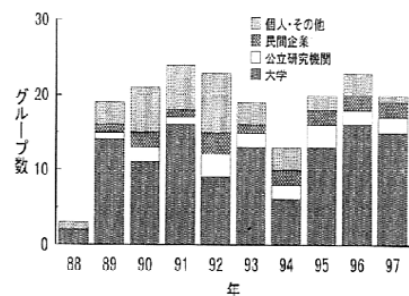


図3. 所属別研究グループ数の推移